■エッセイ

アテルイ没後千二百年

高橋信雄（学芸部長）

延暦二十一年（802）7月、坂上田村麻呂のもとに降った蝦夷の族長アテルイとモレは田村麻呂と共に京に上った。しかし、田村麻呂の懇願もむなしく、8月アテルイらは国家反逆の罪で、河内の国楫山で斬刑に処せられた。逆賊としての扱いを受けてきたアテルイが、今千二百年の時を経て英雄として蘇った。

◎多彩な記念事業

2002年は、アテルイをはじめとする古代東北史をテーマにした講演会・シンポジューム・展覧会などが、岩手県内各地で開催された。また、アテルイを題材としたアニメーション映画の製作上映、漫画本や普及書の発刊も行われた。さらには、アテルイを描いたミュージカルや演劇の公演、コンサートや記念歌CDの製作までみられるなど、まさにアテルイ・ブームの年となった。

多彩な記念行事によって、古代東北の地域史が、一般市民に浸透したことは間違いない。今後さらなる裾野の広がりに期待したい。また、わらび座のミュージカルの全国公演、東京新橋演舞場での市川染五郎らによる舞台や関西方面でのシンポジュームの開催にみられるように、古代の蝦夷に関する公演等が全国的な広がりをみせていることも大きな特徴といえる。

こうした背景は、蝦夷研究の着実な進展があってのことと思われる。蝦夷研究の進展は、交易とか産業といった側面からのアプローチや北方世界との交流など広範囲かつ多角的な視点での取り組みがみられるし、考古学的な成果によるものも大きかったと考えられる。

ただ、資料が少ない中での個人の英雄化は、歴史的事実からの遊離を招きかねないし、地域ナショナリズムとの結びつきも心配である。いずれにしろ、アテルイ・ブームが一過性のものでなく、研究の更なる深化を期待したい。

◎騎馬

アテルイが歴史の記録に記されるようになるのは、延暦八年（789）巣伏の合戦からである。アテルイは、胆沢に進出した征討軍に壊滅的な損害を与えた蝦夷軍のリーダーとして登場する。

約五万三千人といわれる圧倒的な兵力に勝る征討軍に対し、蝦夷軍は高度な組織力で対抗し、巧妙なゲリラ戦法を取る。アテルイらの勝利は、地勢を熟知し、敵軍の動向等情報の正確な把握とともに、機敏性や統率力の優秀性があってのものと考えられる。

実際の戦闘では、弓矢が主な武器として使われたのではないかと想定されるが、ゲリラ戦法の重要な役割を担ったのが馬ではないかと思う。

つまり、蝦夷軍の勝利は、騎馬での機敏性に弓矢戦法を自由に操ることと、リーダーの統率力と情報の正確さが大きな原動力ではなかったろうか。

時期的にはやや遅れるが、『続日本後記』承和四年（837）に「弓馬の戦闘は、夷獠の生習にして、平民の十も、その一に敵するに能わず。」と書かれている。同じような状況が、巣伏の合戦でもみられたのではないだろうか。

日本における馬は、威信財としての性格が強い。金銅製の豪華な飾り馬具にみられるように馬は、権威の象徴でもあった。

蝦夷が馬を飼育するようになったのは何時頃か明確でないが、水沢市・中半入遺跡から出土した馬の骨から五世紀後半にまで遡りそうである。その後、馬飼いが、蝦夷の産業にまで発展したと考えられる。

律令国家の成立以後、律令国家と蝦夷側との軋轢が強まる。戦闘がしばしばおきるなかで、蝦夷の人々は、馬を戦いの場で使用するようになった可能性がある。その後、馬は日本における合戦で重要な位置を占めるようになる。

◎刀剣

アテルイは、どんな刀を使っていたのであろうか。アニメーションなどでは蕨手刀らしきものが描かれていることが多いようである。確かに蕨手刀は、二百数十例ほどの発見例がみられるが、その八割ほどが東北地方・北海道で確認されている。しかし、蕨手刀のすべてが、蝦夷の刀だと断定することは出来ない。正倉院に残されているものもあるし、古い蕨手刀は関東・中部地方で発見されている。

日本の古代の刀剣は、大陸に起源をもついわゆる直刀と呼ばれるものである。特にも環刀大刀とよばれるものが主流であり、その後円頭大刀、圭頭大刀、頭椎大刀、方頭大刀など装飾大刀とか儀杖用大刀と呼ばれるものが製作される。

これらの直刀は、実践用というより、権威の象徴であり儀式的な要素の強い刀剣である。また、利器としての機能は茎が細く刀身は長く、突く機能が優先していたとされる。蕨手刀も発生期には、儀杖刀的要素が強いものであったと考えられる。

平安時代後期に成立したとされる日本刀の大きな要素は、湾刀化と鎬造である。このうち湾刀化については、蕨手刀の存在が大きく影響したとされる。

八世紀になり律令国家と蝦夷との衝突が頻繁におこる。こうした戦闘における実践用の刀剣として改良が加えられた結果が、湾刀化の始まりではないかと考えている。こうした改良が、東北地方北部つまり蝦夷側で行われた可能性が高い。直刀の流れを汲む方頭大刀や立鼓柄刀にも東北地方北部にのみ柄反りの傾向がみられる。これは、儀杖刀から実践用の刀剣になるとともに、機能面では「突く」から「切る」に変化したと考えられる。

没後千二百年のアテルイから馬や刀剣について記してきたが、東北の古代史は、まだまだ興味ある課題が多く残されている。